みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

スリランカ被災地の現状と今後の課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澁谷, 利雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001385

スリランカ被災地の現状と今後の課題（SER73）

正　誤　表

頁	行	誤	正
14	2	王子	王女
14	3		
14	18	マングローブ	マングローブ林
14	20		
18	29		
18	31		
14	24	成育	生育
18	25	タコノキです。	これが“ムードゥケイヤ”と呼ばれているタコノキ科植物です。
18	26-27	ハマヒルガオ	グンバイヒルガオ
18	31		
18	35		
20	10		
20	10	ハマヒルガオです。	削除
20	10	海岸ですが、	海岸には、
25	8	ベントダ	ベントタ

第１部　被災地の現状と今後の課題

―― スリランカ ――

司会（林　勲男）：早速最初のご発表，スリランカについて和光大学の澁谷利雄先生にお願いします。

それから，この会場では「先生」と呼ぶことはやめまして，「さん」づけでお呼びしたいと思います。

では，澁谷さん，お願いいたします。

スリランカ被災地の現状と今後の課題

澁谷　利雄
和光大学　人間関係学部

私の場合は，林さんと違って，「災害」をテーマにして研究してきたわけではないのですが，スリランカの文化研究に文化人類学の立場から25年あまりかかわってきました。ご存じのとおり，スリランカでは長年内戦状態が続いていて，また私は内戦をテーマにしたことはないのですが，そうした状況で研究活動をやっていると，どうしてもいろいろなところでかかわらざるを得ません。そして，そうこうしているうちに津波の災害が起きたというわけです。内戦からの和平と災害からの復興に関しても，日本政府や，近年では日本のNGOもある程度役割を果たしているし，またODAなどを通じて，既にスリランカの文化，社会，内政に日本の側からはかなり大きな影響を与えてきています。そういうなかで，私も現地の友人からの要請やNGOからの要請等もあって，黙って見ているわけにはいかないという思いでNGO活動にもかかわってきました。和平の問題，それから津波に関しても同様です。

1　初めての津波被害

私なりのささやかなかかわりのなかから気がついたことを報告したいと思います。

私にとっても，スリランカの今回の津波の災害というのは初めてですし，スリランカの人々，それからスリランカの歴史を見ても，実はこれは初めてのことでした。スリランカのパーリ語の古典文献に『大王統史（マハーワンサ）』があります。そのなかに，

今から2300年前に，ある非常に悪い王様がいて，その王様を懲らしめるために，海の神様が大波でもって懲罰をした。それに対して，予言者は王子を差し出せば波がおさまると言って，そこで王子を差し出して，王子を海に流してようやくおさまったという記述があり，それが今回の津波のときに話題になりました。だから，スリランカの人たちは，２回目なんだと言うんですが，それは神話のなかの世界です。何しろインドの南部からスリランカにかけては地震もほとんどないし，今のところ，私の知っている限り，歴史上，小さな地震はありましたが，被害が出るような地震は今までなかったと思われます。そういう状況ですので，地震についても，津波についても知識がないこと，これが被害を大きくした一つの大きな理由だと言われてきましたし，また私もそう思います。

それから，この間，私が現地のNGOの人たちと被災地を何カ所か歩いて気がついたことの一つは，インドネシア等と比べると，スリランカの場合は，津波がそれほど内陸深くまでは入っていません。被害の大きい部分は特に200～300メートルとか，数百メートルぐらいのところなんです。しかも，場所によっては，砂浜ぎりぎりのところに住居が密集しており，そういったところが大きな犠牲を出しているということです。沿海地域の開発のあり方が，犠牲を大きくしたもう一つの理由だというふうにこの間気がついています。

マングローブについては，世界各地で以前から保護や植林が呼びかけられてきましたが，今回も，津波以降，インドネシアやタイ，それからインドでその重要性が強調されています。しかし，マングローブよりも，最前線にあるのはタコノキです。そのタコノキの重要性に今回初めて現地の人たちが気がつきました。私自身もこれには全くこれまで関心を持ったことがありませんでした。スリランカでは，多分他の地域でもそうだと思うんですが，タコノキは，太平洋，インド洋地域に数百種類見られるもので，極めてありふれたもので，特に海岸線，海辺に成育するものです。この重要性にスリランカで被災地の人々が初めて気がつきました。これは，スリランカの研究者，植物学関係者も，それから沿岸保全局（Coast Conservation Department）でも全く研究もされていませんでしたし，知らなかったことです。しかし，残念ながら，スリランカでは既にかなり破壊されている状態です。ただ，ところどころ残っていて，その残っている近辺の人々が，タコノキの背後では被害が少なかったということに初めて気がつきました。それで，私なども関心を持ち始めたところです。

スリランカの地図がお手元にあると思います。東部州のカルムーナイのあたりが犠牲者が一番集中して多いところです。東部に行ってみますと，タコノキがほとんどなく，破壊されている状態です。要するに，砂浜があって，ヤシの木，ココヤシがあるという，そういう光景がよくスリランカ政府・観光局などは宣伝してきましたが，それこそがまさに破壊されている状態そのものであって，極めて不自然なわけです。沿海部の森

林破壊により，大きな被害になってしまったということが言えると思います。東部については，国連開発計画（UNDP）の指導で防砂林の植林が行われていましたが，この場合でも，現地のNGOは，若干残っていたタコノキを引き抜いて，その跡に針葉樹を植えるということもなされていて，惨たんたる破壊状況です。

2 復興活動 ― 現状と課題：生活再建と自立にむけて

今回スリランカで気がついたことの幾つかの支援についての問題ですけれども，緊急支援の段階では，日本と違って，隣人や親族，隣近所の助け合いが迅速に行われました。それから，テレビ局，NGOや国際機関，各国政府もかなり迅速に動いたということも当然あります。日本では，神戸の震災のとき，ボランティアがたくさん駆けつけて大きな役割を果たして注目されましたが，スリランカでは，遠くからボランティアが駆けつけて，被災地に長期間滞在するという格好はとりません。隣近所の助け合いが一番大きかったと思います。仏教寺院とかモスク，教会などが被災者のキャンプになりました。その後の復興活動のほうがむしろ問題で，世界各地から援助金，援助物資の波がその後押し寄せて，それがまた大きな混乱やら問題を引き起こしているという状況だと思います。

南部，東部，北部というふうに大ざっぱに見ますと，南部から西部にかけては，現在では多くは仮設住宅に収容されています。恒久住宅を現在，建設中です。しかし，2005年12月25日の現地の新聞等で発表されたものを見ても，4,299軒が建設済みで，渡されたということです。必要とされている家屋は９万8,000戸です。この住宅建設の非常な遅れがいろんなところから指摘されています。このほとんどは南部や西部に集中しています。東部は，今でもテントや仮設住宅に収容されていて，恒久住宅の建設は，建設計画はあるのですが，ほとんどまだ着手されていません。瓦れきの片づけも余りされていない状態です。北部に関しては，現在は2002年から停戦の状態にはありますが，反政府武装勢力「解放の虎（LTTE）」の支配領域で，NGOの活動はありますが，詳細は不明です。特に電気等がまだ復旧されておらず，道路の復旧もされてないところがかなりあると伝え聞いています。そういうわけで，進展の度合いの違い，不公平がかなり見られます。

津波直後は「解放の虎（LTTE）」と政府軍兵士の若干の協力関係などもあったのですが，各政府から提供されている資金や物資の分配をめぐって，むしろ関係が悪化しています。それが，北部の復興が進まない理由の主因だと思います。東部に関しては，政府軍及びLTTEの両方が支配しています。しかも，LTTEのなかに２年ほど前，反乱があって，内部抗争が生じており，政治的に非常に不安定であるために，復興が遅れているということです。

支援の不公平等の問題ですが，その原因としては有力政治家や，官僚の介入，また大規模なNGOが権力と癒着していることがあげられます。現在の大統領は，11月の大統領選挙で就任したのですが，それ以前は首相でした。９月段階でも現地の新聞で指摘されていましたが，彼の選挙区は，南部のハンバントタ県です。ハンバントタ県に対しては，必要とされる住宅の３倍，300％の住宅建設計画があると指摘されていました。12月の現地の新聞を見ても，ハンバントタ県では1,000軒の崩壊家屋に対して3,000軒の住宅が建設中と報じられています。そういう極めて露骨な偏りがあります。最近，この冬休みに短期間ですがNGO関係の用事で東南部のパーナマという村を訪ねました。ここは大きな砂丘に囲まれていたために，被害が非常に少なかったところです。東部にしては被害が非常に少なかったところですが，パーナマでは現在，崩壊家屋５軒に対して30軒が建築中です。このように非常に多すぎるところもありますが，むしろ建設されていない，足りないところが圧倒的に多いのです。

さらに問題点をいくつかあげるならば，この間の主な流れとしては，政府の役割が非常に弱い，政府が責任を果たしていないといえます。これまでの復興活動の大半は，国際機関とNGOによってなされています。政府が役割を果たせないことの主因は，LTTEとの和平が進展していないことです。そのために，各国政府から提供されている資金が活用できないのです。６月段階で，ようやくLTTEとの間で共同復興機構のようなもの，“ジョイント・メカニズムのよう”なものが合意されました。これで進むと思い，私は，ちょっと勇み足で，『明日の友』というところに小文を書いたときに，「これからは目覚ましく進展するに違いない」と書いてしまいました。ところが，その直後にシンハラ人側の反対があって，頓挫してしまいました。そうこうしているうちに大統領選挙が近くになって，もう９月ごろからは大統領選挙に一斉になだれ込んでしまいました。北部に対しては，いまだに余り援助がいっていないのです。NGOレベルで入っているはずですけれども。

日本からは，日本政府が支出した無償資金80億円のうち，４月段階では４％と言われていました。その後，11月の朝日新聞の記事では60％ということですが，契約された程度であって，実際には特に東部，北部にかかわるものに関しては，ほとんど手がつけられていないと思います。間組（はざまぐみ）のホームページを見ますと，７月段階から東部州の道路の復旧に８億円のプロジェクトが始まったというふうにありますが，12月に東部を訪ねた際に現地のNGOに聞いても，どこかに事務所は置いたらしいという，その程度の話しかなくて，まだ工事は始まっていないように思われます。

和平と内戦からの復興が休止状態になって，それがまた津波からの復興活動にも影響してうまくいかないという，特に東部・北部に関しては，内戦からの戦災も受けて，また今回の津波の災害も受けたという二重に災害を受けている人たちもいます。

そして，政府，大規模NGOや草の根NGOが連携していない，余り連携がうまく

いっていないということも復興がおくれている主因だと思います。むしろ有力政治家や官僚がかなり介入しておくらせてしまっているということのほうが実情かと思います。自分の選挙地盤にNGO活動を持ってこさせようとして，かなり圧力をかけます。

もう一点は，「シンハラ復興主義」といいましょうか，仏教原理主義的な傾向が高まっていて，津波以前からそういう傾向がありましたが，津波もまたさらにそれを高める契機になったと思います。それが現在の大統領の当選にもつながっているわけで，人民解放戦線とか，「シンハラ民族の遺産」という僧侶を主体とした政党が仏教原理主義的な傾向を強めています。それがLTTEの反発にもなっています。また，LTTEは，この間，政府側ののらりくらりとした無責任な対応に対して，和平の問題及び津波の復興の両者に関してですけれども，そういう無責任な対応にかなり腹を立てていて，12月に入って政府軍へ攻撃を始めています。現地の新聞等でも，戦争になりそうだという論調で，かなり懸念されているのが現状です。

もう一点は，特に，この間，私は，東部のムスリムに関心をもってきました。というのは，内戦と和平のなかで政府軍とLTTE，あるいはシンハラ人とタミル人というのは国際的にもかなり認知されてきました。しかしながら，マイノリティであるムスリムは忘れられた存在，疎外された状態に置かれていて，彼らの間に危機感，あるいは孤立感が非常に高まっているのです。彼らはLTTEからは税金などでかなり圧力をかけられています。しかし，そうかといって，政府軍や警察も頼りにならないし，あてにできません。さらにイスラム諸国からも忘れられているというか，関心を持たれていないということで，非常に孤立感を持っています。ムスリムが比較的多い東部では，ムスリムの青年たちが急進化しつつあり，現地の知識人たちがかなり懸念しています。

3　東部州の復興活動

私自身，この間，東部州の復興活動に携わってきましたので，そのことをここで触れておきたいと思います。東部州では，シンハラ人，タミル人，ムスリム，カトリックがモザイク状に混住しているという状況です。ですから，圧倒的な多数民族は，ここにはないと言えると思います。

政府軍，LTTE，LTTEのなかで反乱を起こしたカルナ派，ムスリムの４者の間でしばしば抗争が行われているという状態です。

東部州で，ちょうど１年前の津波をきっかけにして，「統合復興機構（Consortium of Integrated Rehabilitation Organizations）」がつくられました。ムスリムの人たちが中心になって，それにタミル人，カトリック，シンハラ人が合流しているNGOです。現地の小さなNGO75団体がこれに加盟しています。人権問題とか，女性の地位向上とか，職業訓練とか，あるいは孤児の支援とか，植林とか，さまざまなことにかかわって

いるグループです。スリランカでは，政府は，津波の災害以前から，NGOに対して登録制をとっています。しかし，津波による災害以降は，登録は一切認めない，認可しないという方針をとってきました。というのは，津波による災害以降NGOが余りにもたくさんできて，コントロールしにくいので認可しないということだと思うんです。

その総合復興機構に加わっている75のうち，４団体は既に以前から登録されていたものですが，津波をきっかけにしてたくさんのNGOができて，それらが加わったという形です。たしか高桑さんが以前どこかで報告していたと思うんですが，スリランカでは，津波前には600あったNGOが，津波以降は6,000できたとかいうことです。なぜなら，一つのお寺が一つのNGOのような状態で急増したのです。あるいは，町内会の青年団のようなものがたくさん集まっているような状況ということもできようかと思います。ここで東部州の被災地の様子を写真でみていただきます。津波後３ヶ月たった2005年３月にとったものです。これは崩壊した学校です（写真１）。こちらはヒンドゥー神殿で大きく傾いています（写真２）。次はガレキのなかで女性がただずんでいます。まさに爆撃を受けたあとのようです（写真３）。こちらはムスリムの農民のキャンプです。内戦で村ぐるみで海辺の難民キャンプにいたところへ津波を受けて，再び元の村にもどったのです（写真４）。仮設のモスクがありました（写真５）。幸い津波ではそれほど被害は大きくなくて，３人が亡くなったと言ってました。

これは日本で何度も報道された，西南部で列車ごと波に飲み込まれたところです。間もなくこれを使って「津波博物館」にするということです（写真６）。

これは，仏教寺院の境内のテントです（写真７）。仮設住宅の多くは，こんな状態です。テント暮らしもひどいと思いますが，仮設住宅の中もひどくて，窓もあまりないし，屋根はトタン屋根だし，大変な暑さで，環境も悪いし，ちょっと大きめな犬小屋という印象です。まだ２年ぐらいは多くの人たちはこういうところにいるしかないだろうと言われています（写真８）。

タコノキです。日本でも小笠原とか沖縄にこの仲間がみられます。これは，西海岸のベントタの近辺です。このあたりは比較的良い状態で残っていて，砂浜があって，ハマヒルガオがびっしり生えていて，そしてタコノキの森になります（写真９，10）。かつてはこういうタコノキがスリランカのほとんどの海岸に緑の防波堤のような状態で見られたようです。さらに内側のラグーンとか，河口，川沿いにマングローブが生えています。私とNGOの人たちが今一緒に考えているのは，タコノキをもう一度再生させながら同時にハマヒルガオなどの下草，それとマングローブを組み合わせることです。この３者の組み合わせが効果的であろうと思われます。

タコノキに関しては，高さが大体５～６メートルぐらいあり，波を防ぐ防波林になりえます。このあたりでも５～６メートルないしはもっとそれ以上の波を受けているはずですが，びくともしないで，しっかり残っています。ハマヒルガオは砂を守る役目

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

写真 5

写真 6

写真 7

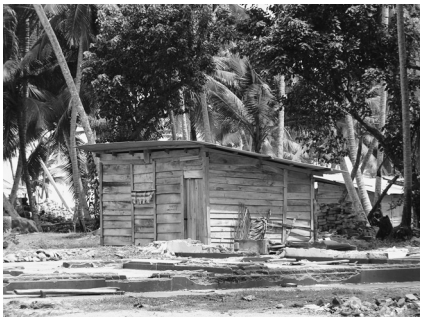

写真 8

もします。当然このタコノキは波を防ぐだけでなく，砂や風も防ぐことにもなりますし，それから暑さや乾燥を防ぐ，鳥とか小動物を呼び寄せる，というように多様な意味があります。かつてはこの葉で敷物とか，バッグや帽子などをつくっていました。その実は薬に使います。また，タコノキの花は仏陀に捧げる供物になります。

これは，最近行ってきた東部州で，ちょっと内側に入ったところにマングローブが見られます。もろに波を受けたところでは，マングローブが半分枯れたような状態になっています（写真11）。タコノキに比べると，海水をもろに受けると弱いんだと思います。

これはマメ科の植物です（写真12）。こういう植物も組み合わせると効果的だと思われます。

ハマヒルガオです。これは東部州の海岸ですが，ハマヒルガオはあるんですが，タコノキは点々と残っているにすぎません。

東部州のNGOが，種をまいて，苗をつくっているところです（写真13）。これは，自然に種から芽が出たものを手にとって見せてくれたものです（写真14）。今，そろそろ雨季が終わりますが，雨季の時期に種が落ちて，芽が出ます。東部州でも，部分的にタコノキが残っているところがあります。こういうところから種を取ったり，あるいは，この下で自然に種から芽が出たものを集めて育てようということです。

研究者の立場からやれることというのは，そんなに多くはなさそうですが，私なりに

写真 9

写真10

写真11

写真12

写真13

写真14

気がついたことがあります。一つやるべきこととしては，こういう被災地や被災者に密着した草の根的なNGOと協力して，生活再建と自立に向けての中・長期的な計画を立てるということだろうと思います。

私が今，関心を持って少し応援をし始めているのは，今申し上げたようなタコノキの植林のことです。

ようやくスリランカの政府筋も動き出しまして，沿岸保全局に現在，津波に関連した植林で登録したNGOが22あります。実際にはまだ始まっていないのですけれども，また，そのすべてがタコノキに関心を持っているわけではないと思いますが，ようやく今年ぐらいから動き出すと思います。

ただ，そこの沿岸保全局も非常に怠慢であって，当初，私たちが相談に行ったとき，彼らが示した沿岸，海岸部に生育している植物のリストにはタコノキが入っていませんでした。私らが指摘した以降ようやくそのリストに入れました。そういったところでも非常に関心が低かったということです。

そういう中・長期的な計画を立てるためにも，被災者や被災地と復興活動の実態を調査する必要があると思います。やはり被災者の必要としているものが届いているか，困っている状態が改善されているか，それをしっかり見ながら中・長期的な計画を立てる必要があると思います。この東部のNGOの場合は，日本で最近，関心が高まっているエコツーリズムの事業にもすごく関心を持ち始めていまして，復興活動の一環としてエコツーリズムをやろうというようなことも現在，計画中です。

それから，日本政府が提供した援助金の使途やNGOのチェック，こういうことも必要だろうと思います。相当なむだ遣いがされていると思います。

私自身は，そういうことを全面的にやれるとは思っていません。当面はタコノキの植林を支援しながら，そういったところからチェックしていくということにエネルギーをそそぎたいと思っています。一応これぐらいにしたいと思います。

質疑応答

司会：どうもありがとうございました。ただいまの澁谷さんのご発表についてご質問，コメントをお受けしたいと思います。

お手が上がらないので，私のほうから一つだけ質問があります。今回，インド洋津波災害の被災地では，特にインドネシアを中心として，お話の中にも出てきましたが，「マングローブの植林」ということが大分注目されています。そのための研究も行われていますが，ただ今のご報告の中では，マングローブではなく，タコノキ(パンダナス)ということですね。その防波林としての効果について，地元ではかなりの関心が集まっているそうですが，先ほどのお話で，沿岸保全局の事業の中に「タコノキ」がリストアップされていなかったそうですけれども，「マングローブ」はあったのでしょうか。

澁谷利雄：マングローブは，しばらく前からスリランカでも保護しなければいけないということになっていまして，その沿岸保全局でも若干の取り組みはあります。これには国連開発機構（UNDP）の援助もあって，若干それを保護する活動はあります。ようやく，最近は，沿岸保全局はそのリストの中に「タコノキ」も入れました。

それから，タコノキの植林については今回の津波以降，アンダマン諸島のNGOが関心を持ち始めたということを聞いています。

西　芳実：西と申します。私はインドネシアのアチェを専門としているのですが，アチェの場合は一般的に，津波を通じて紛争解決のプロセスが進んだと言われていますけれども，一方，このスリランカの場合は，津波を契機にさまざまな国からの援助金が入ったということで，逆に和平の合意というものが崩れていったというお話だったのですけれども，そこのところをもしご存じだったら，もう少し教えていただきたいのです。

支援資金が入ってきたときに，スリランカの場合は，LTTEが分配の窓口になるというか，直接LTTEが支配している地域に援助する際には，LTTEを通さなければいけないという状況があって，このようなことになったのか，それとも，援助という場合には，やはりスリランカの政府にまず支援金を渡して，その使い道を考えさせるというような形で一貫して行われていたのかといったあたりがどうなっていたのか，もしご存じだったら，教えていただければと思います。

澁谷利雄：当初は，各国政府ともスリランカの政府支配地域だけではなくて，全体に対してというつもりで出していたはずです。というのは，停戦状態になっているし，津波直後は，政府とLTTEが共同して復興活動にあたろうという気運もありました。特に，前大統領チャンドリカ・クマーラトゥンガ大統領が率先して共同復興機構のような「ジョイント・メカニズム」を提案して，一度合意しました。しかし，政府側の政権内部にも反対があり，特に「人民解放戦線」と「シンハラ民族の遺産」という政党が猛烈に反対

して，それが頓挫してしまいました。最高裁にも持ち込んで，最高裁もそれが違憲であるという判決を出しました。その反対の理由は何かというと，お金や物をLTTEに渡すと，LTTEが勝手に使ってしまう，LTTEの武力を強化することになってしまうから反対だということが主な理由で，今でもその状態です。

西　芳実：スリランカの状況をまだ十分理解していないので，もしかしたら見当外れかもしれないのですが，そうすると，そもそもスリランカ政府の中で，正当な政府の中でLTTEとの関係をどうするかということの意見が割れてしまった，津波を契機にして分裂したというふうに理解すればよろしいわけでしょうか。

澁谷利雄：前から一枚岩的じゃないんですが，特に津波を契機にしてそうなったと思います。

永井博記：NPO平和環境もやいネットの永井と申します。お話の中で，スリランカといいますと，大きな組織として「サルボダヤ」というのがあると思うんですけれども，その辺の果たした役割なんかは，先生のほうでご研究されたという経過がありますでしょうか。

澁谷利雄：各国政府や，国際機関や，それから国際的なNGOから多くの資金や物がスリランカに届いて，そのかなりの部分をスリランカの大規模なNGOが受け取ったと思いますが，大規模NGOというのは「サルボダヤ」と「セーワー・ランカー」のことです。この二つが確かに大きな役割を果たしてきましたけれども，大きなむだ遣いもしていると私は思います。

木村周平（東京大学大学院）：東京大学の大学院の木村と申します。僕はトルコの地震のことを研究しているのですが，そのトルコからの類推なんですけれども，トルコでは，NGOは，国に対するというか，国に対抗するような形で市民社会をつくり上げていこうという形でできてきたという契機があって，そのせいで，災害後の復興において国と結びつく一方で，メディアとか大学とかと結びついて，防災に関する住民活動や住民教育をどんどん進めていこうというような動きをとっているんですけれども，津波後において住民教育みたいな動きというのは出ているのでしょうか。

澁谷利雄：特に，スリランカの大規模NGOというのは，当初からNの部分が半分ぐらいであって，有力政治家とか特に時の国家権力の中枢と密接な関係を持ってきているというのが現状です。ただ，NGO全部がそうじゃないですけれども，特に「セーワー・ランカー」とか「サルボダヤ」はそうです。政府側も，そういうNGOに依存しているわけです。要するに，そういうNGOがあったほうが外国からいろんな援助を受けやすい。また，政府が余り福祉活動等に手を伸ばさなくてもすむ，金もかからずにすむということで，両方が癒着し合っているという構造があります。

それから，今回の津波の復興支援活動に関しても，有力政治家等ないしは国家権力にある程度密着していないと，うまく進めにくいというNGO側からの都合もあります。

ですから，大統領選挙でこの候補が勝ちそうだなと思うと，そこにドッと投入して，「300％の住宅建設」ということになってしまうわけですね。

住民教育ということでは，そういう必要性が言われていますけれども，どの程度進行しているのか私は把握していません。余り本格的に始まっていると思えません。特に，学校教育のなかに防災教育を取り入れる必要はあると思いますが，着手されているようには思われません。

杉本良男：先ほどスリランカの記録には，「津波」というのが見当たらないとおっしゃいました。ただ，タミル・ナードゥだと，そういう昔の歴史掘り起こしみたいなことをやって，1000年前にあったとか，1500年前にあったとか，後で深尾さんのお話にも出てくるかもしれませんが，そうした歴史の再解釈みたいなことがおこなわれたのですが，スリランカの場合は，同様の動きはなかったということですか。

澁谷利雄：パーリ語の「大王統史（マハーワンサ）」という書物に，2300年前に海の神様が大波をよこしたという記述があって，それが最初の津波だなどと言う人たちがいます。しかし，歴史的な事実というわけではなく，今のところ立証されていません。それに関連して私は思うんですが，スマトラ近辺では，これからも，林さんも指摘したように，大地震が起きて津波が発生する可能性は高いと思います。スリランカの場合は，そこで起きたとしても，今回でも２時間ぐらい到達するまであったわけです。やはり防災教育をある程度やるということとか，それから，今はテレビが相当普及していますから，そういう情報を早く伝えるということをすれば，かなりの程度対応できると思います。ですから，早期警戒システムのようなものはスリランカには必要ないと私は思います。

司会：先ほどのNGOと政府の関係についてですが，日本でも最近，官と民が公をつくるということが，これもやはり官つまり政府や行政のほうが大分音頭取りをしながら進めています。そうした意識ではないわけですね，NGOと政府が癒着しているように見えるのは……。

澁谷利雄：やはり支援する国の側と支援される国の側の経済格差の大きさというのはすごいものがあって，そういうことがもう一つあるんだと思うんですよ。日本から見ると大した金額に見えないかもしれないけれども，受け取った側からすると，相当大きい金額になります。そういうものがいわば棚ぼたでドンと来るわけですから，それをめぐって，普通の経済感覚では対応できないだろうと思います。私らだって，いきなり何十億円かぽっともらった日には，どうしていいかわからなくなっちゃうと思うんです。そういう状況が多分あると思います。だから，そういう経済感覚の違いというのか，ギャップというのか，単純に考えても10倍ぐらいの違いがあると思うんです。その辺，なかなか難しいですね。

司会：この問題というのは，先ほど私がお話しましたように，かなりの支援金が世界中から集まってしまい，その配分をめぐって，あるいはその使途をめぐって，受け取った

側のほうで前進がない。それに加えて，国際的に，正式な合意がなされたのかどうかはわかりませんが，渡した支援金の使用を監視していこうという厳しい目があって，かえって復旧・復興のプロジェクトを遅らせてしまっているという見方もあります。スリランカに限らず，ほかの被災地・被災国でも同様の問題としてあると思いますが，そのことについては，また午後のディスカッションで取り上げることができればと思います。

杉本星子：京都文教大学の杉本です。先ほどタコノキの植林のお話がありましたけれども，現状として，東海岸のカルムーナイというところでは既にタコノキの林が破壊されていたのに対して，西側のベントダでは残っていたということですが，植林を復興するにしても，前提として一体どういう状態で破壊されていたかが，重要かと思います。例えば，そこの地域の経済状況の変化の中で破壊されていたとしたら，そう単純に植えればいいというものではないのではないかなと思うので，その背景を教えていただきたいと思います。というのは，私が研究している南インドでは，津波以前にシュリンプファーム（エビ養殖場）をつくるための沿岸部の破壊が起きていたので，シュリンプファームの復興と組み合わせないと，植林などもやっていけないという状況があるのです。スリランカの場合はどうなんでしょう。

澁谷利雄：これまでの開発のあり方だと思うんですが，一つは，スリランカ政府は，独立以降，観光にすごく力を入れて，その観光の多くは海岸部に集中しているわけです。ですから，じゃまくさいタコノキを切り払って，欧米人に人気のある砂浜をつくってきたということがあります。それから，人口増加に伴って，そういう海岸部にどんどん住宅を建てさせて，それによる破壊も当然あります。タコノキを切り払って住宅地にして，せいぜい植えるとしたらココヤシを植える程度です。それから，海岸沿いに道路をつくる。そうしながら防砂林もつくらなきゃということで，所々残っているタコノキを引き抜いて針葉樹を植えるとか，そういうことが主因だと思います。

杉本星子：ありがとうございます。そうすると，防災林として植えた針葉樹は，実際には役に立たなかったということですか。

澁谷利雄：大した面積を植えていませんし，私が見たものだって，せいぜい成育のいいもので５～６メートルであって，大体のものはまだ１メートルか２メートルぐらいのものです。比較的最近始まったものですし，国連開発機構の指導で行ったものですがほとんど効果がなかったのです。

　ただし，タコノキについて，一部の人たちはそういうふうに関心を持っているのですが，一時期はマスメディアがすごく取り上げたとはいえ，その重要性を理解したのは，むしろタコノキがまあまあ残っているその近辺の人たちです。東部は余りにも破壊されてしまったので，NGO関係者であっても知らない人のほうが多いというか，もう忘れてしまっています。話を聞いてみると，「そういえば，私ら小さいときにこの辺にあったね」という話は随分あります。だから，東部でも，もう一度教育というか，キャン

ペーンというか，そういうものがなければいけないんだと思います。

杉本星子：ありがとうございます。

司会：それでは，これで澁谷さんのご報告と質疑応答を終了したいと思います。